

# 編みから織りへ

—エチオピアの「篩」づくりを事例に—

## 井関和代

### Summary

In the present age, production and consumption have become separated, and many “things” used for daily life up until now are disappearing right in front of our eyes. This paper focuses on a few of these disappearing tools such as the sifter, mortar, and winnow, which are used for processing. It is said that the mortar was used from about 4000 B.C. and is guessed to be a tool used to separate husk and powder with the crush work devised in the same period. However, the sifter, unlike the mortar made from stone, is not yet confirmed as an archaeology exhumation momento, the problem possibly being that the sifter is made from plant material.

It is from the examination of an ancient Egyptian stone statue and fresco after 2500 B.C. that I can confirm the existence of “the Sifter”. In addition, the materials of the

ancient Egyptian Sifter are recorded in "A Natural History" written in the first century A.D. by Pliny the Elder; however, the production method is not described. A tool resembling "the Sifter" used in ancient Egypt is produced in one of the surveys by reporter ground, Ethiopia even in the present age.

In this paper, I examine and report the production of the ethnic groups Shidama and Kambata, who live in the Ethiopian middle southern district. In addition, in the making of “net=thread” tool of Kambata, a thin tree is bent to form an arch. I suppose that this bentwood structure is equivalent to a frame of a loom. However, the technique used with this tool does not squarely fit under our pre-constructed understanding of knitting nor weaving. Therefore, I propose a one instance example that indicates a technical shift and I speculate that this technique is somewhere in between knitting and weaving.

### はじめに

生産と消費の場が分離した現代にあって、多くの「モノ」が我々の目の前から姿を消しつつある。それらの一つに、臼や箕、本稿で取り上げる「篩」といった加工具がある。

これらのうち、臼は、麦やトウモロコシなどの殻の硬い穀物を粉碎するために、B.C.4000年頃から使用され、その粉碎作業にとまなう殻と粉を分別する加工具も、同時期頃には考案されていたと推察されているが、植物を素材とする材質上の問題

から考古遺品としての報告は未だなされていない。また、それらの篩の「網=とおし」部分が、編み技術からなるものか、織り技術からなるものなのかは、推測の域をでない。ただ、筆者はエジプト・カイロ博物館に古王国時代 (B.C.2700-2200年) の篩製作の工程がミニアチュールで遺されているのを確認した。

エジプトとともに、筆者の調査地のひとつであるエチオピア (Federal Democratic Republic of Ethiopia) は、周知のとおり多様な穀類の栽培、また、この地域独自の作物であるイネ科のテフ (*Eragrostis tef* Trotte) や、バショウ科エンセーテ (*Ensete*



図1. B.C.2500年頃の篩と石臼  
カイロ博物館蔵 [三輪 1980:8]より引用



図2. 古代エジプト壁画に見るパン屋の篩  
[NABIL & HAMDY 2005:26]より引用

*ventriosum* Cheesman) の栽培で知られている。そして、それら作物の粉の精製に「篩」が使用されてきた。しかし、エチオピアに居住する農耕民族の各々が、何を素材にして、「とおし」部分を製作したのか、また、その技術に異なりがあるのか、未だ報告がない。

本稿では、それら民族集団のなかから、シダマ(Shidama)とカンバタ(Kambaata or Kambatta)、ふたつの民族集団の「篩づくり」を報告し、その技術の相違を比較検討する。また、後述するカンバタの「とおし」の製作時に用いられる「曲げ木の張り枠」を、織機の「機枠」にあたるものとして捉えて、その技法が「編みから織り」への移行を示す過渡期の事例のひとつであると仮定して、その技術的な論考をおこない、消えつつある加工具「篩」に伝承されてきた、在来知を探ることしたい。

尚、調査は2007年12月の予備調査に続いて、2008年9月、2009年9月に行った。また文中のs/、a/、k/、g/は、調査対象とした現地語を示し、順にシダマ語、アムハラ語、カンバタ語、グラゲ語を意味する。

## 1. 調査地と調査対象の民族集団<sup>(地図1)</sup>

調査対象のひとつであるシダマは、南部エチオピアへの交通拠点となるアワサ(Awasa, Sidama県庁所在地)を拠点に、アバヤ湖からシヤラ湖周辺地域、標高1600-3000mの高地に主として居住する。シダマは現居住地域に16世紀後半に進出し、先住民ホファを同化しながら独自の文化形成をしてゆき、1994年の南部地方国勢では人口182万人と報告されている。

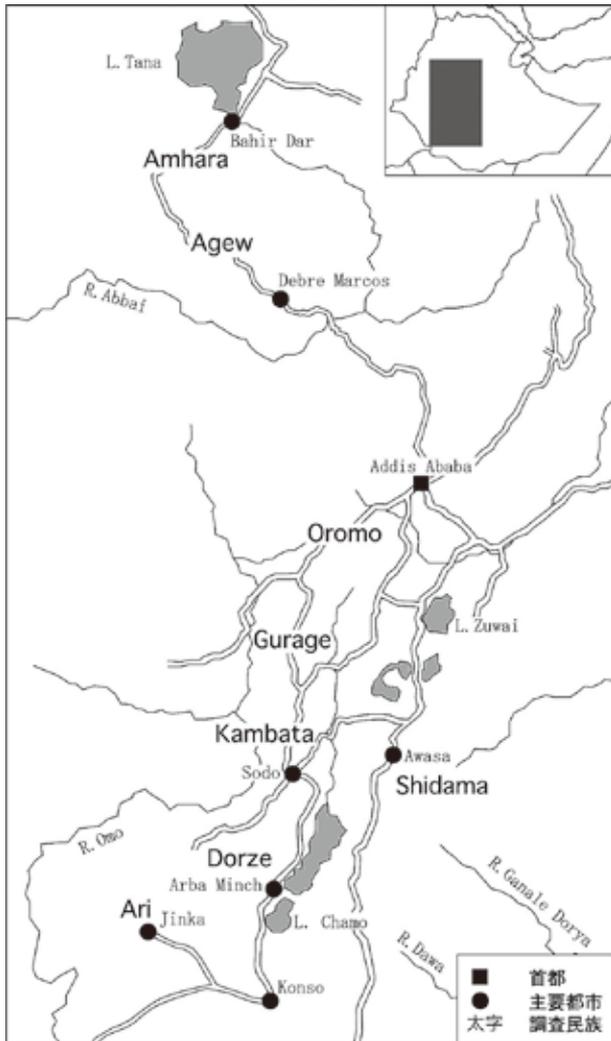
また、他のひとつのカンバタは、アバヤ湖の北西部にあるソド(Sodo, Welayita県庁所在地)から北へ約30キロ、シェワ(Shewa)県との境となるカンバタ・ハディヤ(Kambatta & Hadiya)県、標高約1800m高地に居住する。人口は44万人とされる。

両民族集団はともにアフロ・アジア語族高地東クシ系の言語を話し、高い人口密度をもつ地域社会を形成し、主にエンセーテなどの根菜類の栽培を営んでいる。[綾部 2000:298]

## 2. 篩の製作

### 2-1. シダマの篩製作

#### 2-1-1. 調査地ローヤ村と調査対象者



地図1. 調査地と調査対象とした民族集団

民族集団シダマは半農半牧を生業とするが、調査対象地・ローヤ (Sidama 県 Wondo 地区 Looya) 村の人びとの多くは、農業を生業として換金作物であるソラマメやインゲンマメ、小麦などを栽培し、各戸の屋敷庭などにエンセーテを育てている。また、人びとは村の周辺に多く生育する竹や竹皮の集荷、籠や筵などに細工して、仲買人 (s/Kawado) に販売するなど、多くの産物から副収入を得ている。それらの細工品のひとつに、植物の茎を用いて、男たちが製作する箒 (s/Ficinche) や篩がある。



写真1. シダマの篩の素材・イネ科アワ属 (*Setaria* sp.) 穂首節間の長い茎を選んで採集する

篩の素材となるイネ科アワ属 (*Setaria* sp.) の植物は、牛の放牧場の一角などに柵を設けて半栽培され、雨期の終わる9月頃から順次、穂 (s/Sika) の成熟した茎を男女に関わりなく採集する (写真1)。篩に用いられるのは、穂から第一節までの穂首節間 (s/Siko) の長い茎をとし用 (s/ *Gewalicho*)、また、穂の短いものを篩の枠用の芯材 (s/Suka) に約 60-70 cm の長さ刈り取る。そして、採取した茎は天日で乾燥させて保管する。また、それらを求める村びとにも販売する場合もある。

篩づくりは、この村の男性であれば、誰もが祖父や父から習い、つくることができる。しかしながら、それぞれの加工具づくりに得手不得手があり、篩を得意とする者は限られるという。

村で製作される篩には2種類がある。ひとつが小麦などの粉用のメモ (s/memo)、他のひとつがエンセーテの澱粉 (s/Wasa) 用のツウマシチャ (s/Tumasincha) である。それらは同工程でつくられるが、編まれる網目の大きさで区別されている。

筆者の調査対象者の Botta Keta (2008 年度調査時 87 歳) は、父親から習い継いだ多くの竹編み細工 (籠、養蜂箱など) の専業従事者である。シダマの人びとの在来宗教組織アアボ (s/Aabo) に属し、創造神 (s/magano) を主神に祖先崇拜の信仰し、高齢になった現在では、親族の男性たちに竹細工を教えることを、主にしている。

## 2-1-2. 籐の製作

作業は、芯用のイネ科アワ属の茎を数本、直径約1cm余りの太さに束ねて芯材として、その束ねた芯の端に、ナツメヤシ (*s/Satta, a/Zembaba. hoenix dactylifera* L.) の幼葉を葉柄から外した約2cm葉幅のものを、約1cmにたてに裂きテープ状にし、その葉軸部分を、芯に挟み込み、葉のテープを強くひきながら芯に巻きつけていく。

巻き付ける葉テープは必ず葉先が先端となるようにし、テープが短くなるとその先端をアワの茎の間に差し入れ、新たなテープを足していく。

次第に芯材が棒状になると、彼らの身体サシのひとつ、親指と中指を広げたサイズ (*s/Tako*) を直径にして輪状にする。その輪の重なった部分に、束ねた芯用の草束を重ねて、テープ状にしたナツメヤシの幼葉を一巻きしては、先にできた輪の部分に接する部分に、手前から千枚通しで穴をあけ、そこにテープの葉先を入れて強く引く。一巻きしては、輪に縫い付けるようにして、二重の輪にしてゆく。我が国でいう「巻き上げ編み」技法である。

次に、イネ科アワ属の長い穂首節間 (*neck internode*) の茎の束を準備し、それを、エンセーテの軸を削り貫いて長函状にしたものに入れ水をかけて、しばらく置く。

水で十分に湿らせた穂首の茎を1本採り出し、その節(茎)の部分をつ二つ割りにして、穂首の部分近くまで割いてゆく。穂首を残して2本になった茎のそれぞれを、太ももに押し当て、手のひらで撚りをかけて細い糸状にする。(以後、この細い紐を糸と表記する) 順次、数10本の糸を作っていく。

そして、作りおいた輪の上辺部に一箇所穴をあけ、その穴に準備した糸の穂首部分を通して引く。そして、輪の中心部から反対側となる位置に穴をあけ、先の糸を通す。順次、最初に張った細紐に平行になるようにして、枠の左右に糸を通していき、輪(枠)の全体に約4~5mmの間隔で張り詰める。(写真3)

そして、枠全体に平行に糸を張り終えると、それを横にして先の作業と同様に、千枚通しで枠の中央部の上縁部分に穴を開ける。その穴に2本の糸を通し、先ず1本を手前の糸の下をくぐらせて、上に引く。他の1本を糸の上を越し、次の糸の



写真2. ナツメヤシ (*hoenix dactylifera* L.) Awasaにて幼葉を乾燥させて「市の日」に1握=10Birrで売られる



写真3. Shidamaの籐づくり-1  
芯となる草にナツメヤシの葉を巻き付けて棒状にした後に、輪状の枠をつくり、その枠に細紐を平行に張る。

下を潜らせる。つまり、順次、縄を絢うように2本の糸で振り、ヨコの糸に対して、下から上、上から下へと繰り返して先に張った糸に「タテ振り」して止めてゆく(写真4,5 図2)。

2本の糸を振らせて縄状にしては、先に張ったヨコ糸の列に編み進め、最終列になると枠に穴を開け、その穴に2本の糸を引き揃えて通して置く(写真6)。

順次、2本の糸をヨコ糸列にタテに振り編み進めて、最終列



写真4. Shidamaの篩づくり-2  
タテに細紐を張った枠を横にし、その細紐に直角になるように、2本の細紐を振らせながら編む。



写真5. Shidamaの篩づくり-3  
常に、振り編みでできる編み目を整えながら作業を進める。

になると枠に穴を開け、そこに2本の糸を通して置く。篩枠の枠(輪)全体にタテ振り編みを広げて、「篩のとおし」となる網を編みあげると、枠の外縁に出しておいた残部の糸を引いて、網のテンションを整えて括り止める。

そして、芯材用の茎を数本、直径約1cm余りの太さに束ねて枠上縁部分に沿え、そこに、穂首部分を残して二つ割りしたイネ科アワ属の茎を「巻き上げ」技法で巻き付けていく。作業はナツメヤシの幼葉を巻き付けと同じであるが、直径僅か1mm程度のアワ属の茎を二つ割りしたもので巻き進めていくために、一つの篩をつくるには2-3日を要する。販売は、篩のサイズ、とうしの網目によって異なるが、20-30Birr (1Birr=7yen, 2007年時)であった。

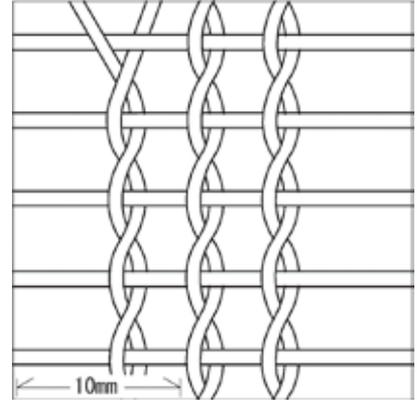


図2. Shidamaのタテ振り編み



写真6. Shidamaの篩づくり-4



写真7. Shidamaの篩づくり-5

## 2-2. カンバタの篩製作

### 2-2-1. 調査地サレラ村と調査対象者

民族集団カンバタの調査対象地セレラ(Kambata &

Hadiya県Dogoyana地区Serera)村では、住民の大半が農業を生業として、主に換金作物であるエンセーテやキャベツ、小麦などを栽培し仲買人あるいは週に一度の「市の日」で販売する。また、さまざまな農産物や加工品を販売して、副収入を得ている。

篩の素材となる植物はシダマと同種のイネ科アワ属(k/Suta)の植物は、近隣の草原に自生する。9月になると刈り集めて、篩縁の芯材用(k/Site)の茎と成熟した穂首節間(k/Wuita)に区分して、乾燥する。乾燥させた茎や篩・籠づくりに関わる道具などは、年間を通じて市の日に求められるが、植物素材の価格は1指分、1握分を基準に1-5Birrであるが、植物の生育期となる雨季は、品薄のために2割高となる。

カンバタの人びとのあいだでは、手提げ籠やエンテテ料理専用の籠、篩などの製作は、女性の仕事である。しかし、ソドと首都アディス・アベバを繋ぐ国道沿いに開かれた比較的新しい村であるセレラでは、篩づくりを行うのは近隣の農村部から嫁いできた女性たちのみである。

調査対象者となったMulu Samiel(2007年度調査時25歳)は、15才の時にセレラに嫁いた後に、「定期市」で篩を売る近郷の女性から、篩づくりを習いうけたという。

カンバタの篩・メマ(k/mema)には2種類がある。いずれもが小麦やトウモロコシなどの粉を精製、また、地酒のゴミを取り除くための濾し作業(k/matasho)の際などに使用するが、呼称に区分はない。

## 2-2-2. 篩の製作

篩製作への準備作業は、シダマと同様にイネ科アワ属の植物の穂首節間の長い茎の束を準備し、それを、エンセーテの葉軸(k/Boruke cho)を削り貫いて、柔らかな繊維素部分(k/Omora)を取り除き、長い函状にしたものに入れて、水(k/Wua)を注いでしばらく置く。

そして、直径約2cm・長さ約2mの棒を用意する。調査時に使用された棒は、垣根用に植林してあるユーカリ(a/Ekal-pitos, k/Bahalzafa. *Eucalyptus globules*)の若い木であった。棒状にしたユーカリの木を曲げて、その両下部を、ユーカリの

樹皮や枯れたエンセーテの葉軸を割いて紐にして括り、 $\cap$ 字状の張り枠(k/Matarea)とする。(写真8)



写真8. Kambataの師づくり張り木(k/Motarea)の準備  
ユーカリの細い木を曲げ、タテ糸の張り木となる枠木を準備する

そして、湿らせておいたアワ属の茎を函から取り出して、それぞれ1本ずつの節部分を千枚通しの錐先で二つ割りしては、腿と掌で撚り(k/meilu)、糸状にする(写真9)。さまざまな長さの糸ができると、それらを長短の2種に選別しておく。

次に、選別した糸のなかから最も長い糸を2本取り出し、その2本の糸端を揃えて結わえる。これを織り作業の織り出しをするヨコ糸(タテ糸張りを兼ねる糸)とする。そして、撚り終えて置いた長い糸の束から、糸を1本取り出し、その両端を揃えて二つ折りにして織作業のスタートとなるヨコ糸(タテ糸の張り糸を兼ねる)とする。そして、撚り置いた長い糸の束から、糸を1本取り出し、その両端を揃えて二つ折りにして曲げ、その曲げた部分の1本を先に準備した張り糸2本の端に挟み込み振らせると、残りの折部分も約1cmを残して、張り糸に絡めて振る。順次、新しい糸を二つ折しては、張り糸2本の間にタテ糸(k/Jamaru)を撚り止めて、約30-40本のタテ糸を整経すると房状となる(写真10)。

房状に整えたタテ糸の張り糸の両端に付け紐(k/Wodoro)をして、それを準備した $\cap$ 字状の枠木(k/Motarea)の上部に



写真9. Kambataの糸づくり  
イネ科アワ属の植物(Suta)を股と掌で撚り、糸をつくる。



写真11. Kambataヨコ振り織り作業-1  
準備した房状のタテ糸を枠木に張り止め、ヨコ糸2本でタテ糸を振り織りしてゆく。



写真10. Kambataタテの糸の準備  
アワ属の茎でつくった糸をタテ糸として整経。  
支えの2本のヨコ糸にタテ糸を振りとめる。



写真12. Kambataヨコ振り織り作業-2  
織り作業時、ヨコ糸を振るタテ糸を手で曳き緊張させる。

強く括り止める。次に区分しておいた短い糸束から2本を取り出してヨコ糸とし、製作者の利き手の手順に従って、房状のタテ糸を端から1本ずつ取り上げては、2本のヨコ糸で振り(k/dadu)織りして止めてゆく(写真11)。

数段を織りすすめ、約3cmの布が織り上がる度に、布の織り耳の両端に付け紐をして枠木に括り、常に織り終えた布部分を緊張させておく(写真12,13)。

その織り作業を繰り返してゆく途中、仕上がり時に円形に近い状態にするために、タテ糸の増し目(k/kattalu)を布の左右にして織り進める。そして、タテに約15センチの階段状に布

が編み上がると、順次、減らし目をしてゆく。

カンバタのヨコ振り織り技法は、すでに記述してきたように、タテ糸にヨコ糸2本を「振り」織るものである。しかし、図2・3に示したように、1本ずつのタテ糸を平行させて織り目を正方形とする平振り(k/Bulia)方法と、2本のタテ糸をひとつとして振り、織り目を三角目(a/Memeta)とする方法がある(図3・4)。

カンバタの人びとの間では、それぞれの織り技法を呼び分けるが使用上の区別がない。ただ、直径40cmに近い大型の篩の場合に2本取りの「三角目編み」が好まれて製作される。また、作業時には、常にアワ属の堅い茎からなる糸(紐)をしなや



写真13. Kambata ヨコ振り織り作業-2  
作業が進み、布状を呈してくると、付け紐をして布部分を常に緊張させておく。

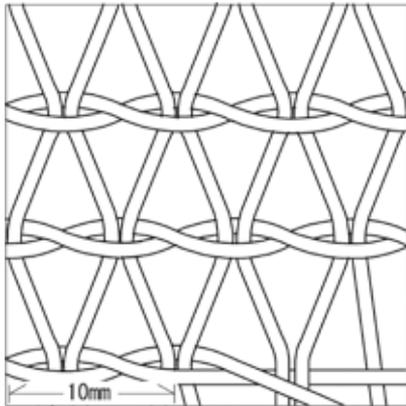


図3. Bulia 技法

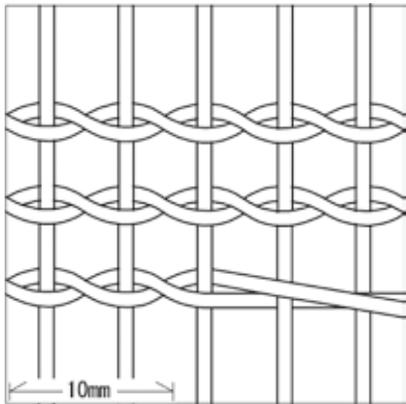


図4. Memeta 技法

かに保つために、水で適度に湿らせながら織り作業を行う。

網状の布ができると、付け糸部分を解き、それを杵木から切りはなす。次に、陶器製の広口の鉢 (k/Shatita) の口縁 (k/Afoom) 部分に織り上げた「布」を広げる。付け糸部分を鉢の底部分に引き、編み布を鉢に均等な緊張度を保ちながら口縁に張り止める(写真14)。そこに芯用の茎を数本束ね、直径約1センチ余りの太さにして、口縁部にあてる。次に、芯用茎の束と口縁部と接する網布部分に、千枚通し (k/Muta) で穴を開け、そこに穂首節間の口縁部にあてる。次に、芯用茎の束と口縁部と接する網布部分に、千枚通し (k/Muta) で穴を開け、そこに穂首節間の節部分を二つ割りにしたものを通して引き上げ、一卷きしては、網布に芯用茎を縫い付けるように「巻き上げ縫い (k/gobu)」をして、節縁、底部を作ってゆく(写真15)。

ひとつの節を製作するには大小に関わらず3日間を目途にして作業をする。市場には20-25Birrで販売する。

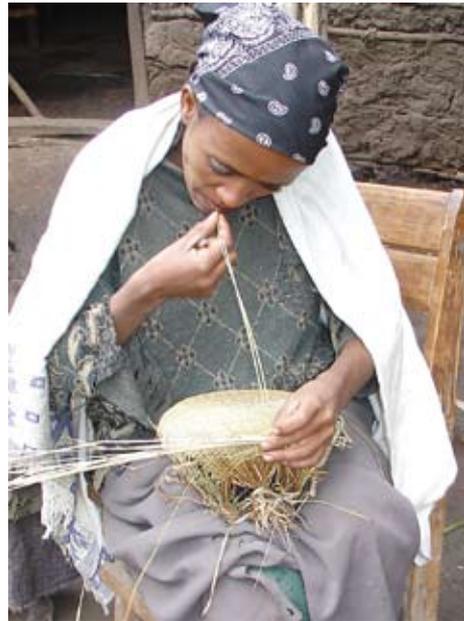


写真14. Kambataの節づくり・縁の取り付け作業  
織り上げた布状の織縁にある付け紐を利用して鉢の口縁部に強く張り、節の縁部分を編み付ける。



写真15. Kambataの篩づくり・底部の取り付け作業  
篩縁部を作ると、鉢の口縁部からはみ出た網布を切り落とし、底部を編み上げてゆく。

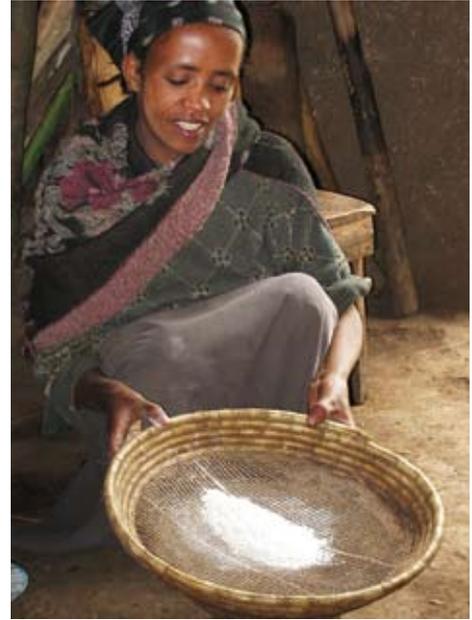


写真16. 振るい作業  
エチオピアの固有の農産物・テフの精選

### 3. シダマとカンバタの技術の比較

上記してきたエチオピアのふたつの民族集団、シダマとカンバタは、ともにアフロ・アジア語族クシ語族東部クシ語群に属し親縁関係にあることは、すでに記述した。また「篩」の素材もアワ属の同種の植物を利用し、できあがった篩を観察する限りではその形態に差異はない。しかし、両民族集団の製作する「篩のとおし」部分の製作工程には、技術発達史的視点から観察すると、かなりの隔りがある。

ともに出来上がった「とおし=網」部分は「振り」技法である。しかし、シダマは輪(枠)の中にタテに糸(紐)を張り、その糸をヨコにして、糸2本で縫うようにして振り合わせて、網目をつくる「編み技法」で製作される。また、素材は異なるが同様な編み技法で篩づくりをおこなっている民族集団にドルゼ(Dorze)やアリ(Ari)の男性たちがいる。ちなみに前者はエンセーテ繊維、後者はナツメヤシの幼葉をもちいる。

一方、カンバタは「とおし」部分の製作とその縁部部分の製

作とは、別工程となる。つまり、カンバタは「網布」を別途につくった後に、篩枠を取り付ける工程をとっている。

未だ確立されずにある染織学上の始原的織機の種類ではあるが、タテ糸を並行に「張る」という織りの定義からカンバタの篩用布の製作をみると、 $\cap$ 字状の曲げ木の枠を、タテ糸を緊張させる機枠と捉えると、上部タテ糸を枠によって張り、下部タテ糸を織り手が作業の都度、指で曳く「手曳機」の構造となり、以下のように、

織機型式:手曳機

整経方式:分離整経式

織物の基本構成方式:ヨコ振り式

製織方式:ヨコ振り・タテ糸張力半固定式

製織技法:ヨコ振り織

織物の組織:ヨコ振り織組織

織りあがりのかたち:四角形

と分類することができる。

そのようなカンバタの篩製作に類似した技術をエチオピア

国内に求めると、カンバタの居住地域に接している民族集団ハディヤ(Hadiya)やグラゲ(Gurage)、また、遠く離れた北部エチオピアのアビシニア高原に居住する中央クシ系方言群の民族集団アグウ(Agaw)の女性たちの製作する篩(a/Wuzari)がある。

ちなみに、ハディヤはカンバタと同種のイネ科アワ属の茎、グラゲはトウシンソウ(藎草g/*Anchat. Juncus effusus* L. var. *decipens* Buchen.)をタテ糸に、イネ科アワ属の茎をヨコ糸にして使用する。アグウは、カヤツリグサ科のオオサンカクイ(a/*Sokoi. Scipus grossus* L.)の茎で篩を製作にする。

またアグウは、大壺の把手を利用してタテ糸を張り「網」を



写真17. Agawの篩づくり-1  
カヤツリグサ科の茎を糸にして、手曳き機で織る



写真18. Agawの篩づくり-2  
タテ糸の固定に大壺の把手を利用する。

織るが、その工程は最もカンバタの工程に類似したものである(写真17,18)。

これらの「網布」の製作技法を単に編み技法と捉えるべきか、「編み技術から織技術への移行」する初原的技術であるかが、本稿のテーマであり、筆者自身の現在の研究課題である。

現時点で筆者が明記できることは、「はじめに」で触れたように、カイロ博物館の篩と同型・技術のものが、また類似する材料を用いて、現代のエチオピアで製作されていることである。また、日本で竹や籐、アケビ蔓などを素材に農夫や竹師がつくる篩と、馬毛や金網などの織布を曲げ木枠に張る専従業者の篩と、ふたつの製作工程が異なる篩が存在していたように、エチオピアにも「篩」製作に2タイプがあり、それら技法が前者を男性のあいだで、後者を女性のあいだで伝えられてきたことである。

## 4. 考察

### 4-1. 原始垂直機との比較

編み物と織物とは、その糸の扱いの大きな差異がある。勿論、編み物に分類されるものの中に、織物のように複数の糸を交差させるポビンレースやマクラメのような技法も存在する。それらの編み糸はタテからヨコに、ヨコからタテにと交差・移動させるものであり、糸の操作によってタテとなりヨコとなる糸である。また、硬質な竹や籐といった素材を組み編みして、組織上は平・綾など、織物と同じ構成となるものもおおくある。

では、織物と編み物とは何が異なるのか。それはタテ糸が平行に複数ならんでいること、またそのタテ糸を、「緊張させる仕掛け」が存在するか、存在しないかが、問題となる。

筆者が、エチオピアのクシ語属グループの女性たちの伝承する「篩の網」製作にみる技術を、「編み」から「織り」へと移行する過渡期の技術ではないだろうか、と本研究に着手した起因に、スウェーデンのB.C.1800-700年代の遺跡から出土した垂直機や、ギリシャのB.C.400年代の出土品の黒絵手土器に描かれた垂直機の存在がある(図5、写真18)。

織機の種類方法には、何種類がある。たとえば、織師とタテ糸の作業位置から分類されるものに地機・高機・空機などがある。また、平行に並んだタテ糸を維持する角度による分類では、地面に対して垂直(堅)機・斜行機・水平機などがある。また、近年では、タテ糸を「張る装置」からの分類もなされている。

本項では、旧来のタテ糸の角度から分類された織機分類に従い、タテ糸を垂直に張る垂直(堅)機と記述する。「これらの形式はそれぞれ地理的な分布をしている。堅機は、機の下部に錘をつけ上部へ織り進める形式のものと、経糸が上下二本の棒で固定され、下の方から上へと織り進められる二つの形式があるが、主としてヨーロッパのインド・ゲルマン語族に中

心があり、アフリカ、北アフリカにまで広がっている。(中略)これらは現在の分布から述べたもので、一地域の形式的変遷は考慮に入れていない」[角山 1968:29-30]。

筆者のこれまで調査してきたインドから西アジア、アフリカの垂直機のすべては、タテ糸の下から上へと織り進める形式のものであった。また、確認することでできたアフリカ大陸最古の垂直機は、エジプトの中部地方にあるB.C.2000年代・中王国時代のベニ・ハッサン(Beni-Hassan)遺跡の壁画の麻糸によるものである(図6、写真19)。

では、タテ糸の下部に錘をつけ、織機の上部から下部へと織り下げてゆく下垂式の垂直機は、地中海を隔てたヨーロッパ

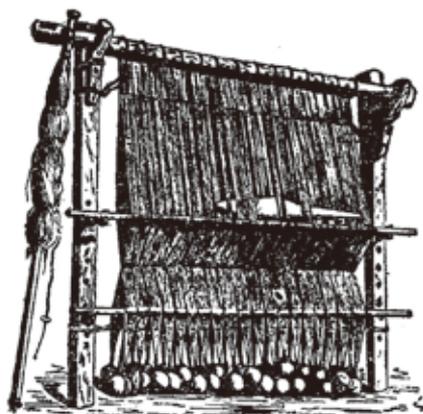


図5. 古代の堅機 (スウェーデンの発掘品)  
[角山 1968:30]より引用

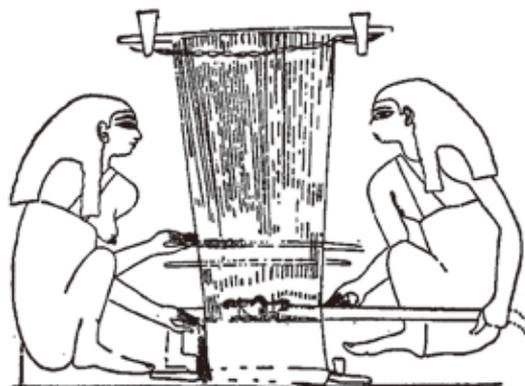


図6. 古代エジプト壁画にみえる水平機  
(チネム・ホテップ墓壁画)[角山 1968:30]より引用



写真18. B.C.4世紀代のギリシャの黒絵手壺にみる堅機  
[JENNIFER 1993:17]より引用



写真19. チネム・ホテップ墓壁画の垂直機  
同壁画には麻の栽培から収穫、糸つくり、染色、織作業まで、古代エジプトの布製作が描かれている(筆者撮影)

の固有のものであるのだろうか。その技術の南下はなかった  
のであろうか。

古代ギリシャにその痕跡を残し、現在ではノルウェーの先  
住民族サーミヤアラスカのチルクットなどの僅かな人びとの間  
で伝承されているに過ぎない下垂式の垂直機で、伝統的な  
繊維素材として用いられてきたのが、新緑期の柳の枝やシー  
ダーの樹皮である。

そのような極北地の織機と、強いてエチオピア・カンバタの織  
機との共通性を探すとすれば、上部から織り(編み)進める技  
法に、共にタテ糸に用いられる繊維素材の堅さがあるのでは、  
と筆者は推考するのである。

また、古代の下垂式の垂直機資料にみえる、タテ糸の緊張  
装置の重りや、開口装置のソウコウに関しては、まず、エチオピ  
アのタテ糸がわずか50cm足らずであることから、織作業の都  
度に必要なタテ糸を手で曳いて張ることとこと足りること  
である、また、そのタテ糸数が30-40本であること、さらにヨコ糸振り  
織りによる網状の荒い布目であるため、ソウコウを取り付けるま  
でもないことである、と考えるのである。

ただ、エチオピアのタテ糸を手で曳く機が、ギリシャのタテ糸  
を重し石で張る垂直機の流れを汲むものであるかは、現時点  
では何ら根拠はない。ここでは、下垂式・垂直機の南下の可  
能性について探るべく、筆者に残された今後の研究課題点を  
明記しておくにとどめたい。

## 4-2. まとめ

篩は、世界各地において穀物の精選に使用されてきた農  
具であった。そして、その使用の禁忌や風俗に、不思議な共  
通項がある。例えば、「頭に被ると背がのびない」「迷子になっ  
た子供を捜すのに篩を首にかけ、網目からのぞくと子供が見  
える」などがある。カンバタでも、「市場で迷子になった子供を  
探すときに、篩ごしでみる」また「篩こしに子供の顔をみると、亡  
くなった親に会える」等々である。

また、アフリカにおける篩の使用は農具とは限らず、アワヤト

ウモロコシなどの地酒を「濾す器」に用いられる。篩を濾過器  
と捉える視点で広くアフリカをみると、その繊維利用や製作方  
法の分布も見え隠れする。

いずれにせよ、本研究は資料の整理の半ばにあり、本稿を  
ベースに、2010年度に実施したエチオピア・エジプト調査で得  
た資料をさらに精査し、稿を改めて、詳細な報告と論考を行う  
計画である。

## 謝辞

本調査は平成19・20年度の科学研究費補助金(代表  
京都大学教授・重田眞義)、平成22年度の科学研究費補助金  
(代表 国立民族学博物館教授・吉田憲司)の海外調査に  
参加して行ったものである。両教授および両プロジェクトのメン  
バーの方々に多くの助言をいただき、ここに謝意を表します。

また、本稿をまとめるにあたっては平成21年度塚本学院研  
究補助金を得た。塚本学院・大阪芸術大学の事務局の方々  
にも、ご助力をいただき、ここに深謝いたします。

NABIL Ebeid & HAMDY Omar

2005 *Life In The Time Of The Pharaohs.*, Nubar Printing House, Cairo.  
三輪茂雄

1989『篩』法政大学出版局、東京。

井関和代

2010「第2章 アフリカの繊維利用の歴史」『アフリカの繊維利用と  
その利用』、(社)国際農林業協働協会、東京。

角山幸洋

1968『日本染織発達史』、田畑書店、東京。

Jennifer Harris

1993 *'Textiles 5000years'* Harry N. Abrams, INC., Publishers

綾部恒雄 監修

2000『世界民族事典』、弘文堂、東京。